

Halu 農法オンライン講座 応用編テキスト (2月)

応用編 (実践編、座学編)

【実践編・2月の作業】

1 今月の収穫

今月の収穫はありません。

2 今月の種まき

今月の種まきはありません。

3 畑の準備 (草刈りと耕耘)

暦の上では、2月4日の立春から新しい年が始まります。厳しい寒さも緩んで、農作業を始めることができる季節だからです。とはいえ、日本は北と南では随分気候が違いますし、近年の異常気象で、あまりこよみの考え方は当てはまらなくなってきました。

さて、まだ雪に閉ざされている北海道、東北、あるいは北陸地方を除いて、関東から西にお住いの方は、畑の準備を始めます。それは、草刈りと耕耘です。この作業は、次の冬を迎えるまで随時行う作業になります。

まず草刈りですが、夏草が枯れて残っているところや、秋に生えてきた草をきれいに刈払機や鎌で刈り取ります。これは、耕耘しやすくするためということと、「地上に生えてきたものは土の中に入れない」という Halu 農法の考え方にもとづくものです。



とはいえ、完璧に刈り取らなくても、もちろん構いません。多少刈り残しがあったとして

も、気にしないでください。プランター栽培の場合は、ハサミなどで枯れ草を切って、プランターの隅に積んでおくと良いでしょう。

次は耕耘です。要するに畑の土を混ぜ返して、種まきなどをしやすくする作業です。畑では耕耘機を使っても良いですし、鍬やスコップを使って人力で土を混ぜ返します。この時期は、冬眠中のカエルやトカゲなども出てくることがあります。ある程度耕したら、レーキを使って平らに均します。これで準備完了です。



この時期は、まだ土が凍っているところもありますので、凍ったところがなくなったら耕して下さい。

【座学編】

「雑草といわれる植物」

農業や園芸の世界では、「雑草」という分類があります。要するに食べ物や観賞用の花以外は雑草と呼ばれます。農家はこの雑草を嫌います。しかし、Halu 農法にとって雑草類は大切な存在です。とくに、土の中の微生物が、野菜作りに適しているかどうかを見極める材料になります。

たとえば、まだ野菜の共生微生物が少ない畑では、ヨシとかマツヨイグサなど茎が硬くて背の高い草が生えます。そして、次第にメヒシバやエノコログサといった背の低いイネ科の雑草類が生えてきます。Halu 農園では、こうした変化がとてもよくわかります。

このほか、Halu 農園には、食べられる雑草がたくさんあります。ですので、雑草というより、野草と呼ぶほうが良いかもしれません。この辺りを動画でご紹介します。

以上

講師・監修横内猛 農業技術研究所（農業生産法人）株式会社歩屋代表取締役。 食と農ジ

ジャーナリスト。慶應義塾大学経済学部卒業後、全国紙記者を経て、「すべての人が幸せに暮らせるコミュニティのあり方」を求め、主に福祉や教育の現場にかかわる。(1986～2006年) さまざまな社会問題がいつそう深刻化していくなか、問題の根本に「食と農の歪み」があるという考えに至り、自ら画期的な農業技術である「自然農法」に注目し、新しい農場技術の研究を始める。(2007年～現在) 独学で試行錯誤を重ね、自然農法の仕組みを考察し、2013年8月には、大玉スイカやマスクメロンの栽培に成功。2015年7月特許取得(方法特許第5770897号) この技術をさらに深め、新しい自然観、新しい社会の構築を提案しています。

農業技術研究所歩屋 http://ayumiya.co.jp/?page_id=52